

## 第1回 メソポタミア、災害の記憶と復興 – ギルガメシュ叙事詩からバベルの塔へ

ギリシア語で「二つの河の間」を意味するメソポタミア。春の雪解けに伴う洪水を制御しつつ、灌漑用水を確保するメソポタミア文明はシュメール人によって築かれた。ダムや堤防、運河という大規模な土木施設は灌漑農耕の技術から発達したものだ。都市文明の始まったイラクのメソポタミア地方は肥沃な土地で、紀元前3000年頃には運河を張りめぐらした大都会だったという。人類最古の都市文明を築くもとになったのは、この地域で豊富に採れる良質の粘土だった。当地の人々は家や宮殿を作るのに粘土と切り刻んだ葦を混ぜて天日で乾かしたレンガを用いた。時には燃料を燃やして粘土を焼き、レンガの強度を高めた。レンガの表面や継ぎ目には天然に産出するアスファルトを塗って防水性を確保した。また粘土を手のひらサイズに成形したタブレットに葦で作ったスティルスという筆記具を押しつけ、楔形文字で契約書や財産目録などの文書を残した。粘土に支えられた文字通り「泥まみれ」の社会だといえるが、レンガや粘土板文書は何千年経っても、火災や老朽化で消滅することはない。

「水を制する者は天下を制す」というが、治水と灌漑の技術は太古から統治の基本だった。この社会に「大洪水伝説」が残っており、バビロニア時代にギルガメシュ叙事詩という文学書の中に組み込まれた。毎年の洪水には灌漑技術が対応できても、津波のような大洪水となればわけが違うという教訓だ。粘土板に楔形文字で記されたギルガメシュ叙事詩は全体の半分ほどしか残っていないが、現代では日本語に翻訳されたおかげで、この感動的な世界最初の文学書を読むことができる。

物語は神話時代からの脱却、理性の目覚めを謳う壮大な内容だが、その第十一書版に大洪水の話が出てくる。大洪水に際して神々は「家を打ち壊し、船をつくれ。持ち物をあきらめ、おまえの命を求めよ。品物のことを忘れ、おまえの命を救え」と叫ぶ。船とは60m四方の方舟のことだ。大洪水が襲ってきたとき、方舟は山頂（高台）に漂着し、船に乗り込んだ人と動物は救われた。その後には彼らは、神々から河口付近に暮らすことを許され、永遠の命を与えられたというものだ。

太古の時代にも津波避難と同じ話が残っていて、命を守るためいち早い高台への避難が必要だという教えである。これとよく似た話はギリシアではデウカリオンの大洪水、旧約聖書（創世記）のノアの洪水として、その他世界各地で現代にまで伝わる。これらは古代メソポタミア略年表にあるように数千年前の気候変動によって氷河の雪解けに伴う海進による大洪水（あるいは津波）のことを指しているのかもしれない。

前2千年紀にメソポタミアの中心となったのは、バビロン（アッカド語ではバベル）という都市だ。前1750年頃にハムラビ王がユーフラテス河のほとりに豪壮な宮殿と巨大な聖塔ジググラトを築いた。しかし相次ぐ戦乱と地震のために何度か破壊されては再建を繰り返したらしい。前600年頃、ネブカドネザル王が「私はその場所を移動させることもなく、はるか昔にそうあるべきだったように基礎を作り塔を再建した」と書いた粘土板が残っている。シュメール人からアッカド、バビロニア、ヒッタイトと人種の興亡が繰り返された古代社会だが、メソポタミアでは神殿や聖塔などの巨大建築に限らず、城壁でさえ時代が下っても必ず同じ場所に復興する慣わしだった。

絶え間なき戦乱や天変地異にさらされる厳しい人間社会であるからこそ、自分たちが苦闘してきた歴史に対する覚悟として、安易な建て替え復興は決して行わなかったのだろう。

(参考図書)

キエラ「粘土に書かれた歴史」（岩波新書）1958年

三笠宮崇仁編「生活の世界歴史1 古代オリエントの生活」（河出書房新社）1976年

筑摩世界文学大系1「古代オリエント集」（筑摩書房）1978年

A.H.Podany “ The Ancient Near East “ Oxford University Press, 2014

古代メソポタミア略年表 (参考図書をもとに作成)

年代	メソポタミア文明	備考
BC10000年以前	大洪水伝説 ユーフラテス川中流域で麦類の穀物栽培BC8000年頃	最終氷河期の終末(気候の温暖化、海面の上昇)～ BC8000年頃
BC5000年頃	神殿都市ができる→南部にエリドゥ遺跡 北部から南部へウバイド土器広まる(都市国家成立) 日干しレンガの使用盛ん	ヒブシサーマル: 気候適期 (BC4000-3000年頃) 乾燥地の湿潤化
BC2900年頃	シュメール人の初期王朝→都市国家間の覇権争い多数 最古の楔形文書群(シュメール語)	
BC2600年頃	シュメール人のウル第一王朝～BC2450年	ギリシア本土で青銅器時代はじまる
BC2500年頃	シュメール・ラガシュ第一王朝～BC2371年 諸建築に平レンガの使用広まる	
BC2371年	アッカド王朝(サルゴン王)～BC2180年	
BC2200年	ラガシュ第二王朝(グデア王シュメール文化の復興)	
BC2120年	シュメール人、ふたたびバビロニア全土の支配(政治の中心が南部に移動)	
BC2113年	ウル第三王朝(新シュメール時代)ギルガメシュ叙事詩など	シュメール文学の編纂盛ん
BC2047年	エリドゥにジググラド建造	
BC2004年	ウル第三王朝滅亡→シュメール語はバビロニアに受け継がれる	
BC1894年	バビロン第一王朝成立→小都市バビロンに拠点	
BC1792年	ハムラビ王(第6代王)シュメール・アッカド全土の統一	
BC1760年頃	ハムラビ法典編纂	
BC1595年	バビロン第一王朝滅亡	
BC1115年	アッシリア帝国時代はじまる	この頃「海の民」大移動
BC1025年	バビロン王朝滅亡(以後500年間はアッシリアの支配)	
BC744年	アッシリア帝国、シリア・イスラエルも征服して世界帝国 サルゴン二世、センケナリブが即位し、首都ニネヴェで神殿、大宮殿を造営	
BC680年	エサルハドン即位(バビロン王を兼任)、帝国版図の拡大	この頃、大地震あり
BC625年	新バビロニア王朝(首都バビロン)→アッシリア滅亡(BC612)	
BC605年	ネブカドネザル二世即位→エルサレム包囲し、略奪 バビロン始め全土で都市整備(神殿・宮殿・運河) バベルの塔・空中庭園が建造される	ヘブライ人のバビロン捕囚
BC539年	アケメネス朝ペルシアによって新バビロニア王朝滅亡	